様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２４ 日現在

機関番号：８７１１１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１９９７４

研究課題名（和文）高良玉垂宮の仏教美術に関する基礎的研究－山内安置場所の復元と神仏分離過程の整理－

研究課題名（英文）Basic study on Buddhist art of Kora-Tamataregu Shrine : Estimation of original installation location and organizing the process of separating Shinto and Buddhism

研究代表者
國生　知子（KOKUSHO, Tomoko）

九州歴史資料館・学芸調査室・研究員（移行）

研究者番号：８０９１１４５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：　福岡県久留米市の高良山に鎮座する高良大社は、筑後一ノ宮として崇敬を集める。古くは高良玉垂宮と称し、神宮寺も隆盛して全山に社殿堂塔が築かれた。明治時代の神仏分離を経て山の神宮寺は廃絶。山内寺院の実態については不明な点が多い。
　本研究では、高良山麓の寺院を調査し、神仏分離によって山から移座された仏像・仏画の特定を進めた。またそれらの元の安置場所を推定し、山の様相の復元を試みた。結果、山の複数寺院について、安置仏や宗教的役割を考察することができた。また、神仏分離時の記録を整理し、山の作品が移座先で受け入れられていく過程を追跡。作品の移座を通じて、山の信仰が山麓域へ継承されていく過程を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　高良山及び高良玉垂宮は、筑後国を代表する山岳霊場でありながら、これまで仏教的側面については充分に検討がなされてこなかった。本研究によって把握された仏像・仏画等の作品群や、関係する僧侶等の名前は、高良山の歴史的・宗教的位置づけを見つめなおすための基礎資料となるものであり、学術的な意義が認められる。
　また、明治時代の状況を整理することは、無差別的な破壊行為として語られがちであった神仏分離について、改めて省みる材料となる。神仏分離の記憶が失われつつある現在、当時の仏教美術の保護の取り組みを具体的に明らかにした点に、社会的意義が認められる。

研究成果の概要（英文）：Kora Taisha Shrine is located on Mt. Kora in Fukuoka Prefecture. Until the end of the Edo period, it was called Kora-Tamataregu, and was a place of syncretism where gods and Buddhas were enshrined together. Due to the policy of separating Shinto and Buddhism in the Meiji period, the temples on the mountain were abolished and only the shrines remained. Today, the actual status of these temples is no longer known.
In this study, I investigated temples around Mt. Kora and searched for Buddhist statues and paintings that were originally located on Mt. Kora. Many works were discovered, making it possible to speculate about the history of the temples.
It is generally understood that Buddhist art was indiscriminately destroyed during the separation of Shinto and Buddhism. In reality, however, people both inside and outside the mountain protected the Buddhist art. And by moving the art from the mountain, they are preserving the faith that had been passed down on the mountain to this day.

研究分野：仏教美術

キーワード：山岳霊場　仏教美術　神仏習合　神仏分離　九州

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

福岡県久留米市の高良山に鎮座する高良大社は、神功皇后の三韓出兵を補佐したとされる高良神（高良玉垂命）を主祭神として祀り、筑後一ノ宮として崇敬を集める。古くは、高良社・高良玉垂命神社・高良玉垂宮と呼ばれ、神宮寺も隆盛して全山に社殿堂塔が築かれた。筑後国を代表する山岳霊場である。

明治時代の神仏分離を経て、山内の神宮寺組織は廃絶。現在の山中に、仏教に直接結びつく遺品は残されていない。現存する神社建築や神宝類の壮麗さに比べると、寺院関連の遺品は極端に少なく、このことは、山から仏教のイメージを遠ざけ、山の仏教的側面の検討を遅らせる要因となってきた。最盛期には二十六ケ寺三百坊が隆盛したと伝える高良山だが、現在、それら寺院の歴史や由緒、安置仏、宗教的役割などの実態は、ほとんど不明の状態となってしまっている。

けれども、改めて高良山の周辺に目を向けると、山とのゆかりを伝える仏教美術は思いのほか多く残されている。山麓域の複数の寺院が、神仏分離によって山を下りた仏像・仏画を安置し、今日に継承しているのである。その一部は昭和５０年代に追跡調査され、いくつかの作品が『久留米市史』（第３巻、久留米市史編さん委員会、昭和６０年）や、シンポジウム『古代九州と高良山』資料（高良山シンポジウム実行委員会、昭和６１年）に報告されている。

これらの作品は、高良山の山内寺院を考える上で極めて重要な存在である。一方で、この頃の調査は作品の分布を把握することに主眼が置かれていたため、個別の作品調査は実施されておらず、美術史的な位置づけや、宗教的意義についての分析は充分ではない。また、高良山にあったとする根拠が明示されない場合が多く、移座の過程なども明らかにされていない。“神仏分離によって多くの仏像が破棄、或いは山外に移座された”という一般的な説明に留まるのみである。振り返るに、この当時はまだ神仏分離の記憶や伝承がわずかなりとも社会に共有されていたのだろう。特別な根拠を示さずとも、作品と山との繋がりは半ば自明のこととして受け止められていたのだと推測される。

しかし、神仏分離から１５０年を経た今日、これらの記憶は急速に薄れてきている。もはや、移座先の寺院でさえ、どの像が山からもたらされたのか、明確に意識していないことも多い。改めて、山にあった作品を特定し、移座の過程を明らかにしていくことが喫緊の課題となっている。また、山内寺院に関する情報が限られる中、ゆかりの作品の把握数を増やし、それらを精査して得られる情報の解析度を上げていくことは、山の実像を知るために極めて重要な作業であるだろう。

近年、高良山は様々な学術分野において注目され、研究が進展しつつある。歴史学の分野では、高良大社が所蔵する古文書の悉皆調査が進み、近代を含む新たな資料群の存在が確認されている。考古学の分野では、遺構平面分析によって、山内空間の復元が試みられている。このような中、新たに美術史の立場から高良玉垂宮の神宮寺を見つめなおすことは、高良山研究の活性化に資するものと期待される。

２．研究の目的

本研究では、以上の現状を踏まえ、ふたつの目的を設定した。

ひとつは、高良玉垂宮ゆかりの仏像・仏画の存在を明らかにしながら、神仏が習合していた頃の山内の様相を復元的に考察することである。ゆかりの作品群はどこに、どの程度現存しているのか。それらの制作年代や美術史的位置づけはどのようなものか。また、それらは本来は山のどこに安置されていたのか。これらの問題を造形や記録に基づいて考察し、かつての山内のあり方を視覚的に浮かび上がらせることを試みる。

次に、明治時代の神仏分離の状況を整理し、作品群が山麓に移座された過程を明らかにする。また、移座の後、作品群が山麓で受け入れられていく過程も追跡する。作品の移動の過程を客観的かつ学術的に検証することによって、日本の信仰文化の大きな画期である神仏分離が、山とその周辺地域に及ぼした影響を分析する。

３．研究の方法

研究は、作品調査を中心に進める。高良山の山麓に位置する寺院において、仏像・仏画を中心とする仏教美術の悉皆調査をおこない、安置仏の現状を把握する。次に、銘文や箱書などを解読しながら、元は高良山にあったと推定される作品群の絞り込みをおこなう。あわせて、古記録や古絵図などを分析し、山内にあった寺院に関する情報を収集する。これらを通じて、作品と山内寺院との関係性を明らかにし、山の様相を探っていく。

神仏分離時の情況については、寺院明細帳や当時の寺の記録類を確認し、関連する情報を収

集する。ここでは、口頭伝承や先行研究の成果を踏まえながらも、それに依拠しすぎず、根拠となる一次資料を確認することを目指す。この過程で、元の安置場所が特定される事例もあるだろう。
　高良山との関係が指摘される山麓寺院は、複数が知られている。その中から、本研究では、研究期間を勘案した上で、３つの寺院を調査対象に選定した。即ち、高良玉垂宮の本地堂の本地仏を受入れた福聚寺、山内寺院の僧侶が神仏分離後に身を寄せた国分寺、座主本坊の由緒を継承する寺院として明治時代に創建された御井寺、の３寺院である。

４．研究成果

　研究は、１年間の期間延長を経て、令和３～５年度に実施した。仏像・仏画を中心に悉皆的な調査をおこない、写真撮影と調書作成を実施した。また、古文書・古記録についても、高良山や神仏分離に関わるものについては内容を確認した。結果、計画した３寺院のうち２寺院の調査を終了させ、残る１寺院に着手する段階に至った。
　進捗に遅れが出た主な要因は、初年度にコロナの影響を受けて現地調査が充分にできなかったこと、また、その後の調査で、想定以上に多くの作例が見いだされ、調査に時間を要したことにある。しかし、これは、当初の想定以上に多くの情報が得られたことをも意味しており、全体としてみれば、高良山及び高良玉垂宮の仏教的側面に迫る成果をあげることができたと考えている。
　一番大きな成果は、高良山にゆかりの作品群の特定が大きく進み、失われた山内寺院について、安置仏の傾向が見え始めてきたことである。座主坊に次ぐ規模を誇った明静院に関しては、慈恵大師像や鬼大師像などの作例が集中して確認され、元三大師信仰の一大拠点であったことが明らかとなった。愛宕信仰に関わる青天寺については、勝軍地蔵像や天狗像など場に相応しい作例が見いだされ、都仏師による洗練された造形が相応の寄進者の存在を窺わせた。どこに何が安置されていたのかが明らかになることによって、それぞれの寺院の信仰のあり方や場の性質を読み取ることが可能になった。
　次に、銘文や箱書の調査によって、多くの僧侶の名前が見いだされた。これまで、高良山に関わる僧侶は、歴代の座主以外については解明が進んでおらず、記録に名前が出てきても事績も分からないことがほとんどであった。しかし、今回の調査によって多くの僧侶の名前が確認され、特に、近世の作例では、複数の作品に共通する僧侶が関わった事例や、僧侶間で仏像・仏画・経典などの譲渡がおこなわれている事例が確認できた。これは、僧侶や寺院の関係性を示唆するものとして注目される。現段階では断片的な情報に留まるものも多いが、集積を続けることで、山内組織のあり方を検討する重要な基礎資料となることが見込まれる。
　そして、神仏分離時の作品移座の過程については、記録を辿ることでかなり詳細な状況が把握できた。藩県の指示による移座の事例や、山を追われた僧侶が相当数を持ち出した事例、また、数十年の時を経て収集や買戻しがおこなわれた事例などが確認され、それぞれの状況に応じた作品保護の実態が明らかになった。さらに、山を下りた尊像が、受け入れ先の山麓寺院で徐々に従来の信仰と馴染み、新しい信仰の場を形成していく状況も窺われた。多くの人々の尽力の様子が具体的に見えたことは、神仏分離を無差別的な破壊行為として単純に理解してはいけないと痛感してきた、これまでの実感を学術的に裏付ける成果となった。
　今後は、これらの成果を、令和４年度に採択された基盤研究Ｃ「高良玉垂宮の仏教美術の研究－九州山岳霊場における神仏習合と神仏分離の一様相－」（課題番号 22K00176）に引き継ぎ、さらに充実した成果を出せるようにしたい。

　なお、各寺院の具体的な調査結果は下記のとおりである。

・福聚寺調査（令和３～４年度）
　福聚寺は、久留米藩主の発願により、古月禅材を開山に迎えて創建された臨済宗寺院である。明治時代には、高良玉垂宮の本地堂に安置されていた本地仏三尊像を受け入れ、筑後国三十三所観音霊場の一番札所としての位置づけを継承している。
　寺の什宝については、昭和５０年代に古月禅材ゆかりの禅宗寺院という点に注目した悉皆調査がおこなわれ、目録が刊行されている。このため、本研究では、高良山に関わる作例について精度を上げた調査をおこない、元の安置場所の特定や、福聚寺への移座過程を明確にすることを目指した。
　木造十一面観音立像・釈迦如来立像・阿弥陀如来立像の三尊からなる高良玉垂宮本地仏は、高良山の祭神である高良神・八幡神・住吉神の本地をあらわしたものである。室町時代（１５世紀）の制作とみられ、中世、戦乱に巻き込まれて衰退したと伝えられる高良山が、活発な活動実態をもっていたことを示す作例として注目される。内刳を施さない一木造の古式な構造や、両脇侍の如来像が螺髪を違えて彫りあらわす表現など、先行する古像の存在を推定させる点でも興味深い。
　また、鎌倉時代（１３世紀）の木造不動明王立像は、高良山内にあった極楽寺千手院に関わると推定され、明暦２年（１６５６）に吉野右京によって制作された小厨子入りの愛宕大権現

像（木造勝軍地蔵騎馬像・天狗坐像・役行者坐像）が、同じく山内にあった愛宕山青天寺の像であることも明らかになった。
　神仏分離時の情況を知る上では、『官辺帳』が大きな役割を果たした。時系列に沿って寺に関わる文書の写しを記録したもので、これにより、藩県の社院局の指示で仏像が福聚寺に譲渡されたことや、その後、寺が２０年の歳月をかけて移座像を安置する堂宇を新設していく過程などが明らかとなった。

・国分寺調査（令和４～５年度）
　国分寺は、高良山の北東に位置する天台宗寺院である。聖武天皇の発願による筑後国分寺の由緒を受け継ぐ古刹であり、創建当初から場所を移転させつつも、今日に法灯を伝えている。江戸時代には小堂となって高良山の管轄下にあり、神仏分離の際には、山内の明静院の住持が山を追われて身を寄せた。
　調査では、南北朝時代（１４世紀）とみられる木造慈恵大師坐像をはじめ、元三大師の彫刻・絵画が多数確認された。特に、秘仏とされる江戸時代（１７世紀）の像は、体内に明静院の本尊として制作された旨の墨書が確認され、他の多くの作例の存在とあわせて、明静院が元三大師信仰の重要な拠点であったことを明らかにした。また、これらの作品の中には、比叡山延暦寺や東叡山寛永寺との関わりを示すものが含まれており、高良山の造像環境を考えるにあたり、視野を大きく広げる必要があることが認識された。さらに、調査の過程では、明静院の歴代住持の名前を記した位牌も見つかり、実態がほとんど不明だった明静院を考える際の基礎資料となった。調査の結果、現在の什宝の大部分が高良山由来のものであり、山の状況を極めて良好に保存していることが明らかとなった。
　この他、本来の安置場所を特定するには至らなかったが、平安時代後期（１２世紀）の木造神将形立像や、中世博多に拠点をおいた猪熊姓仏師の手になる元亀３年（１５７２）の木造不動明王坐像が確認され、高良山周辺の造像環境の豊かさが窺われた。
　神仏分離時の移座の状況については、明治時代の『寺院明細帳』に受け入れの時期や関わった僧侶の名前が詳細に記されており、明静院から国分寺に移された僧侶が大量の作品の移座に尽力した様子が明らかとなった。

・御井寺調査（令和５年度）
　御井寺は、高良山の登山口に位置する天台宗寺院である。神仏分離によって座主本坊である御井寺蓮台院が廃絶した後、天台宗の熱心な再興運動によって山麓に創設された寺院である。高良山の神宮寺を考えていく上で極めて重要な寺院であるが、これまで文化財調査はなされてこなかった。
　本研究では本格的な調査まで至らなかったものの、事前調査を実施し、小さな仏像や破損仏を含めた大量の作例が現存していることを確認した。今後は、基盤研究Ｃにおいて、調査を継続していく予定である。

　一連の成果は、２本の論文にまとめて公表した。応募段階では報告書の刊行を予定していたが、その後、本研究を発展させた基盤研究Ｃが採択されたことを受けて、本研究単独での刊行を見送った。基盤研究Ｃの最終段階で、両研究の成果をあわせた報告書を刊行することとする。
　この他、九州歴史資料館や、高良山がある地元の久留米市で住民を対象とする講座・講演をおこない、地域への還元を心がけた。

・九歴講座「高良山の仏教美術－山の内外で守られた仏像群－」九州歴史資料館、2023.1.14
・久留米市えーるピアカレッジ「高良山の仏教美術－山麓寺院調査から見えてくる山の姿－」、エールピア久留米、2023.11.25
・久留米水曜会「高良山の仏教美術－筑後国分寺の調査成果と近世明静院－」リベール久留米、2024.2.21

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 國生　知子	４．巻 48
２．論文標題 福聚寺観音堂の諸仏について－高良山ゆかりの作品群を中心に－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 九州歴史資料館研究論集	６．最初と最後の頁 45－60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 國生　知子	４．巻 49
２．論文標題 筑後国分寺の仏教美術について－近世高良山の元三大師信仰を示す作例に注目して－	５．発行年 2024年
３．雑誌名 九州歴史資料館研究論集	６．最初と最後の頁 63－82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関